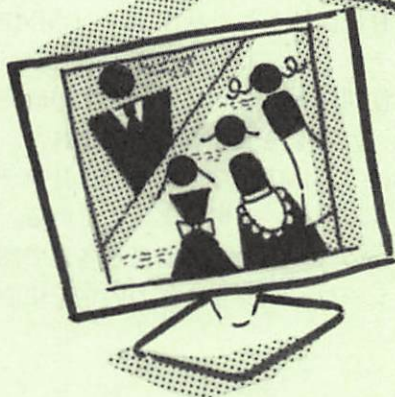
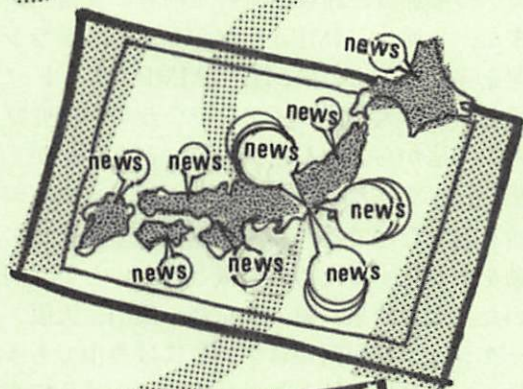
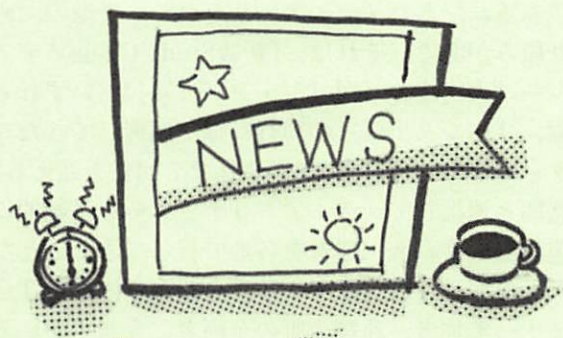


GMMPから メディア・リテラシーワークショップへ



CONTENTS

特集 GMMPからメディア・リテラシーワークショップへ 2

- Part1 ネットワークから地域へ 3
- Part2 各地で展開したメディア・リテラシーワークショップ 8
- Part3 2.16夕方のニュース番組の構成 16

報告1 オスロ・チャレンジとMAGICネットワーク 20

報告2 FCT第6回研修セミナー関西で開催 23

データバンク 国内篇 24

let GAZETTE

編集/執筆 Editor
鈴木みどり (発行人代表)
西村寿子

執筆スタッフ Staff Writers
登丸あすか 新聞清子

データバンク Databank Writers
田島知之、竹内希衣子、高山亮太、
篠塚 公、西村寿子、中野恵美子
黛 岳郎

イラスト Art Director 市川雅美
編集総務 Managing Editor 新聞清子
定期購読・発送 Subscriptions & Shipping
佐々木はるひ
印刷 Printing 大信写植印刷株式会社

FCT市民のメディア・フォーラムは、1977年の創設以来、視聴者、研究者、メディアの創り手が、性別、年齢、職業的立場、社会的地位を超えて社会を構成する一人ひとりの市民として集い、メディアをめぐる多様な問題について語り合い、実証的研究と実践的活動を積み重ねるためのひろば(フォーラム)として機能してきた。FCT活動は各地でのワークショップやシンポジウムの開催、調査報告書の刊行、など多岐にわたる。なかでも、すべての市民、特に子ども、女性、高齢者、障害者、民族的・人種の少数者などのマイノリティ市民の視点からメディアを読み解き、メディア社会を生きる力の獲得をめざすメディア・リテラシーの研究と実践は、FCT活動の中核をなすものである。

特定非営利活動法人
FCT市民のメディア・フォーラム
Forum for Citizens' Television & Media

理事 鈴木みどり、新聞清子、
宮崎寿子、佐々木はるひ、
高橋恭子、西村寿子、
篠塚 公、黛 岳郎、
谷内博一

Media Literacy Project in Japan :
<http://www.mlpoj.org/>

事務所
神奈川県横浜市中区新港2-2-1
横浜ワールドポーターズNPOスクエア内

資料問い合わせ FAX0466-81-8307

銀行振込 東京三菱銀行藤沢支店
普通預金 1559401

郵便振込 エフシーティー00190-3-84097

購読料 年2500円(3回発行)

特集

GMMP2005 コーディングから

世界各地で一斉に、同じ日のテレビ、ラジオ、新聞のニュース報道をモニターし、メディアが日々の出来事の中から選別し、送り出している「ニュース」に女性がどのように登場しているかを世界全体で、またそれぞれの地域で、主として数量的分析によって追究するプロジェクトであるGMMPが2005年2月16日に実施された。日本ではGMMPの一環にメディア・リテラシーワークショップを組み込んだ展開にしようと広く参加をよびかけたところ、全国から11グループ、130人余が参加する全国展開が可能になった。この経緯については前号で報告した。

こうした全国展開が可能になった背景には、FCTがこれまで積み重ねてきたメディア・リテラシー推進のための地道な取り組みがある。それは、『新版Study Guideメディア・リテラシー [入門編]』『同 [ジェンダー編]』(いずれも鈴木みどり編、リベルタ出版)の刊行、毎年開催してきたファシリテーター研修セミナー(2005年8月で7回目を迎える)、地方行政機関と連携してメディア・リテラシーを系統的に学ぶための連続講座の企画・運営を各地で行ってきたことなどである。実際、参加した11グループは、その中心に、FCT会員や研修セミナー参加者、連続講座の企画者、受講生がいる。

また、今回「GMMPからメディア・リテラシーへ」という課題を実践するために、日本GMMPサポートデスクをFCT事務局と立命館大学メディア・リテラシー研究プロジェクトにおき、各地から参加したグループときめ細かく連絡を取り、支援を行ってきた。それぞれの地域でもコーディングシートを送り返すだけで終わらず、足元でのメディア・リテラシー活動を活性化するための契機としたいという問題意識を持っていた。その結果、横浜、京都、岡山、大阪、秋田ですでにワークショップが開かれ、10月には豊中에서도予定されている。7月1-2日に開催された秋田では、GMMPをきっかけにメディア・リテラシーに取り組む市民の会が誕生し、メディア関係者、女性問題ボランティア、大学の研究者など多様な人たちが集い、大変な熱気と活気に包まれた。

このように、GMMPからメディア・リテラシーワークショップへという展開は、着実に実現している。そこで今回と次号では、2.16のコーディング結果と各地で開催されたメディア・リテラシーワークショップの内容を中心に詳しく報告していく。

メディア・リテラシーワークショップへ

Part1.

ネットワークから地域へ

●全国から11グループが参加

2.16の世界モニター日を迎えるまで、GMMP日本コーディネーターおよび横浜と京都に設けた2つのサポートデスクと各モニターグループは連絡を密にとりながら、準備を進めてきた。

FCTフォーラム（04年12月、横浜）終了後、コーディネーターは、ニュース番組録画計画の説明書や邦訳したテレビのコーディングガイド、記入用シートなどをモニターグループへ送付。各グループは、それらをもとに、録画計画を立て、コーディングを行った。各地の参加者は、きめ細かな連絡だと驚いたかもしれないが、このようなプロセスは、GMMPガイドラインの手順に沿ったものであり、これまでFCTが市民活動の中で培ってきた方法でもある。

●参加グループとコーディングした番組

コーディングに参加したグループはつぎのとおり。「秋田・市民のメディア研究会」（秋田）、FCT事務所に集まった会員グループ（横浜）、「メディアカレッジ静岡」（静岡）、「立命館大学メディア・リテラシー研究プロジェクト（Rits MLP）」（京都）、「プレ講座受講生の会」、「MIKOFY」、「とよなかメディア・リテラシー研究会」、「すてっぷGMMP」、「エンパワメントいばらき」（以上、大阪）、「メディ

ア・フォーラムおかやま」（岡山）、「風—おおい—」（大分）。

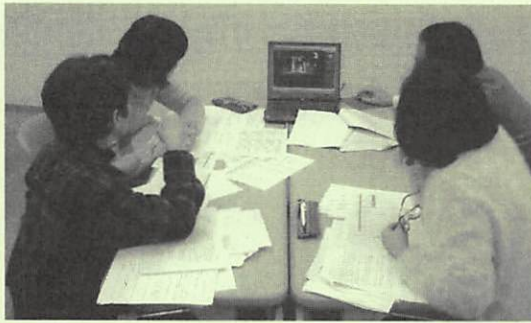
3月7日、モニターに参加した11グループのうち、9グループから記入済みのコーディングシートがコーディネーターのもとに届いた。各グループがコーディングした番組は計25番組。図表1は、コーディングした番組の一覧で、夕方と夜の時間帯別、系列別に、放送局や番組名、担当したグループ名を記載している。

●グループの概要

先に述べたように、参加した11グループのほとんどは、中心に長年メディア・リテラシーを学んできたFCT会員がいる。これまで各地の会員によって、メディア・リテラシーに取り組む人々のゆるやかなネットワークが形成されてきたが、今回、GMMPをきっかけに各地域での活動が本格的に始まったといえるだろう。

つぎに、各グループの報告から、その活動のプロセスと概要をみておこう。

秋田・市民のメディア研究会は、GMMPへの参加を契機にグループを立ち上げた。研究会設立記念セミナーと題して3月1日に集まりをもち、GMMPサポートデスクも参加して、全員で夕方のローカルニュース番組をコーディングした。コーディング終了後、グループから「5年に1度のGMMPにぜひ参加したいと、当初の計画を前倒ししてグループを立ち上げた。さらに夏にはワークショップも実施したい」との声が寄せられた。



メディアカレッジ静岡は、静岡女性センターアイセル21の連続講座・女性カレッジ（03年10月～04年10月）の修了生を中心に、11月ごろグループを結成。メンバーは、会社員や公務員、メディア関係者、教員などである。2月19日にアイセル21に集まり、主に静岡のローカルニュース番組のコーディングを行った。コーディングの結果について全員で話し合う中で、「ニュース報道では男性が中心的な役割、女性が補助的な役割を担っている」など、固定的な性別役割を指摘する意見が数多く出た。

大阪からは複数のグループが参加した。

GMMPプレ講座受講生の会は、2003年11月～翌年1月まで開催された国際人権大学院大学プレ講座メディア・リテラシーコースの受講生によって結成された。1ヶ月に一度集まり、メディア・リテラシーの学習を続けている。2月25日と3月4日にメンバーが集まり、関西ローカルのニュース番組をコーディングした。その際、「確定申告のニュースでは、女性の芸能人が登場するのみ。プロ野球のニュースでも、女性タレントの訪問を大きく取り上げるなど、ニュース番組全体が商業化されている」との指摘があった。

とよなかメディア・リテラシー研究会は、大学院生、公務員、教員などで構成されている。3月5日に集まり、NHKの夜のニュース

番組をコーディングした。初めてメディア分析を体験したメンバーの一人は、「この経験をとおして、自分がメディアとどのように接してきたかを振り返るきっかけにしたい」と感想を寄せている。

すてっぷGMMPは、05年1月30日に豊中男女共同参画推進センターで行われたメディア・リテラシー講座（FCTが企画協力）の受講生で結成された。また、MIKOFYは、同センターの職員で構成されたグループである。参加者からは、「メディア・リテラシーは以前から興味があり、今回、参加できて嬉しい」、「世界中で同じ日の報道をジェンダーの視点でモニターするこのプロジェクトは大変意義深いと感じている」との声があった。

以上がコーディングに参加したグループである。なお、コーディングと合わせて質的分析のワークショップを行ったグループについては、本号で後述する。

●新聞とラジオのコーディング

新聞とラジオのコーディングは、立命館大学メディア・リテラシー研究プロジェクトの院生が担当したが、その経過について簡単に報告する。

新聞は、朝日、読売、毎日、日経、産経、京都新聞、計6紙を対象とした。各紙のトップページから10項目のニュースを選び、ニュースのテーマ、取り上げられる人物や発言を引用されている人物の性別や年齢、職業／社会的地位などに注目しながら、コーディングを行った。

新聞のコーディングの結果、トップページで女性を取り上げる記事はほとんどないが、生活面や地域のページでは女性の意見や活動を取り上げる記事がいくつかあった。コーデ

ィングの参加者は、女性の登場の少なさに驚きながら、女性を取り上げる記事で欠けている視点や意見についても話し合った。たとえば、この日の記事では、「生涯を通じた社会保障や公共サービスなどの受益と負担の一世帯平均の格差が、60歳以上の世代と将来世代では、一億円近くに達する」という、内閣府の試算を伝えるニュースがあった。ここでは、年代別の格差しか示されていないが、ジェンダー間の格差も指摘すればより問題が明確になる、との意見が出た。

ラジオは、NHK-FMのニュース番組(19:00-19:20)、大阪OBC「ニュースパレード」(17:00-17:30)、MBSラジオ「ナイトアングル」(21:00-21:30)の計3番組を対象とした。ニュースの内容を書き出しながら、ニュースのテーマ、ニュースを読むアナウンサーや取り上げられる人物の性別、年齢、職業/社会的地位などに留意し、コーディングした。

ラジオのニュースでも、アナウンサーの女性数は数多く登場するものの、取り上げられる人物はほとんどが男性であった。

図表1. コーディングした番組一覧

時間帯	No.	系列	放送局	放送時刻	番組名	コーディングしたグループ
夕方	1	NHK	NHK	19:00-19:30	ニュース7	Rits
	2		NHK秋田	18:10-19:00	ニュースパークあきた	秋田
	3		NHK静岡	18:10-19:00	たっぷり静岡	岡山
	4		NHK岡山	18:10-19:00	きびきびワイド	静岡
	5	TBS	MBS	17:50-18:19-18:55	ニュースの森/VOICE	Rits
	6		SBS	18:19-18:55	SBSテレビタ刊	静岡
	7		山陽放送	17:50-18:19-18:55	ニュースの森/イブニングニュース	岡山
	8	テレ朝	ABC	17:54-18:17-18:54	スーパーJチャンネル/ニュースゆう	Rits・ブレ講座・MIKOFY
	9		秋田朝日テレビ	18:18-19:00	スーパーJチャンネルあきた	秋田
	10		静岡朝日テレビ	18:29-19:00	とびっきり!しずおか	静岡
	11		瀬戸内海放送	16:55-19:00	KSBスーパーJチャンネル	岡山
	12	フジ	関西テレビ	17:54-18:17-19:00	スーパーニュースほっとカンサイ	Rits
	13		秋田テレビ	18:17-19:00	AKTスーパーニュース	秋田
	14		テレビ静岡	18:17-18:55	SUTスーパーニュース	静岡
	15		岡山放送	17:54-18:17-19:00	OHKスーパーニュース	岡山
	16	日テレ	読売	17:50-18:17-19:00	ニュースプラス1/スクランブル	Rits
	17		秋田放送	17:50-18:17-19:00	ニュースプラス1/プラス1秋田	秋田
	18		静岡第一テレビ	18:18-18:56	静岡〇ごとワイド!	静岡
	19		西日本放送	17:25-19:00	ワイドニュースプラス1	岡山
	20	テレビ東京	テレビ大阪	17:00-17:25	ニュースアイ	ブレ講座
夜	1	NHK	NHK	22:00-23:00	ニュース10	Rits/とよなかML研/すてっぶ
	2	TBS	TBS	22:54-23:50	ニュース23	横浜
	3	テレビ朝日	テレビ朝日	21:54-23:10	報道ステーション	横浜
	4	フジ	フジ	23:30-23:55	ニュースJAPAN	横浜
	5	日本テレビ	日本テレビ	22:54-23:25	きょうの出来事	横浜

テレビ番組のコーディングの結果から

各グループは、モニター日から約3週間のうちに、コーディングの作業を終え、結果を日本のコーディネーターに送付した。

ここでコーディングによる数量分析の結果から、夕方のニュース番組のデータを取り上げる。図表2は、東京キー局・夕方のニュース番組に登場する、キャスターやレポーター、他のジャーナリスト、ニュース項目で取り上げられる人物の性別・年齢別の人数を集計したものである。なお、ここで報告する分析結果は全体のごく一部である。実際のコーディングでは、ニュースのテーマやニュースの範囲（国際的なニュースか国内ニュースか、など）、取り上げられる人物の職業・社会的地位やニュースにおける役割、被害者として登場しているか否かなど、さまざまな観点から分析している。

●ニュースを伝える人々

まずNHK「ニュース7」をみると、キャスターは男性10人のみ。レポーターは、女性5人、男性2人で女性が多いが、女性はすべてボイスオーバーなど音声のみで登場している。また、他のジャーナリストは天気予報士の女性1人である。つまり、「ニュース7」では、画面上で登場するキャスターは男性のみで、ニュースを伝えるのは主として男性の役割となっていることがわかる。

つぎに、民放の番組をみてみよう。

TBS「ニュースの森」のキャスターは、女性9人、男性3人で、女性が3倍だが、レポーターは、女性3人、男性8人で、男性が女性の3倍近い。

テレビ朝日「Jチャンネル」のキャスターは女性6人、男性2人で、女性が3倍だが、レポーターは女性2人、男性11人で、男性が女性の5倍以上である。

フジ「スーパーニュース」のキャスターは女性4人に対して男性2人だが、レポーターは、女性2人に対して男性6人である。

日本テレビ「プラス1」のキャスターは女性7人、男性2人で、女性の方が多いが、レポーターは、女性1人、男性6人で圧倒的に男性の方が多い。

また、他のジャーナリストは、「ニュースの森」で男性1人、「スーパーニュース」で男性2人、「プラス1」で男性1人であり、女性は全く登場しない。

以上から、民放の夕方のニュース番組ではいずれも、キャスターは女性の方が多いが、レポーターや他のジャーナリストは男性の方が圧倒的に多い。したがって、一見、女性キャスターが目立つ位置にいるとはいえ、レポーターや他のジャーナリストをみると、男性が主要な役割を果たしていることがわかる。

さらに、全番組の計でキャスターの年齢に注目すると、「35～49歳」女性9人、男性19人で、男性はこの年齢層で最も人数が多い。「19～34歳」では女性17人、男性0であり、この年齢層で登場するのは女性のみ。全体的に、



「35～49歳」の女性・男性キャスターと年下の女性キャスターという組み合わせでニュースを伝えている。レポーターの年齢をみると、「19～34歳」女性3人、男性10人、「35～49歳」女性1人、男性2人であり、現場に出かけ、取材をするレポーターとして、若手の男性を多数起用していることがわかる。

●ニュースで取り上げられる人々

さらに図表2から、ニュース項目で取り上げられる人物をみてみよう。

NHK「ニュース7」では、女性8人、男性15人で男性が多い。とくに男性の年齢をみると、「35～49歳」3人、「50歳～64歳」6人、「65歳以上」3人で、高齢の男性が数多く登

場している。

TBS「ニュースの森」では、女性9人、男性23人で、男性の方が圧倒的に多い。年齢をみると、最も多い年齢層は、女性の場合「19～34歳」6人、男性の場合「50～64歳」8人であり、女性と比べて、男性の登場人物は年齢が高い人が多い。

テレビ朝日「Jチャンネル」では、女性8人、男性15人で、男性の方が多い。年齢をみると、男性は、「35～49歳」4人とこの年齢層が最も多いが、「50～64歳」3人、「65歳以上」2人と、高齢の人も登場している。

フジ「スーパーニュース」では、女性8人、男性16人で、男性の方が2倍多い。年齢をみ

図表2. 東京キー局・夕方のニュース番組登場人物：性別×年齢

放送局 番組名(放送時間)	登場人物 性別	キャスター						レポーター						他のジャーナリスト						取り上げられる人物						総計						
		不明	12歳以下	13～18歳	19～34歳	35～49歳	50～64歳	65歳以上	不明	12歳以下	13～18歳	19～34歳	35～49歳	50～64歳	65歳以上	不明	12歳以下	13～18歳	19～34歳	35～49歳	50～64歳	65歳以上	不明	12歳以下	13～18歳		19～34歳	35～49歳	50～64歳	65歳以上		
		小計	小計	小計	小計	小計	小計	小計	小計	小計	小計	小計	小計	小計	小計	小計	小計	小計	小計	小計	小計	小計	小計	小計	小計		小計	小計	小計			
NHK ニュース7 (19:00-19:30)	女性	0	0	0	0	0	0	0	5	0	0	0	0	0	0	5	0	0	0	1	0	0	0	1	3	0	0	3	1	1	0	8
	男性	0	0	0	0	10	0	0	10	1	0	0	0	1	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	3	6	3	
	計	0	0	0	0	10	0	0	10	6	0	0	0	1	0	7	0	0	0	1	0	0	0	1	3	1	1	4	4	7	3	
TBS ニュースの森 (17:50-18:19)	女性	0	0	0	9	0	0	0	9	1	0	0	1	1	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	2	1	0	
	男性	0	0	0	0	3	0	0	3	4	0	0	4	0	0	8	0	0	0	0	1	0	0	1	5	1	0	3	4	8	2	
	計	0	0	0	9	3	0	0	12	5	0	0	5	1	0	11	0	0	0	0	1	0	0	1	5	1	0	9	6	9	2	
テレビ朝日 Jチャンネル (17:54-18:17)	女性	0	0	0	3	3	0	0	6	1	0	0	1	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	1	1	2	1	0	
	男性	0	0	0	0	2	0	0	2	6	0	0	5	0	0	11	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	1	3	4	3	2	
	計	0	0	0	3	5	0	0	8	7	0	0	6	0	0	13	0	0	0	0	0	0	0	0	5	0	2	4	6	4	2	
フジ スーパー ニュース* (17:54-18:17)	女性	0	0	0	2	2	0	0	4	1	0	0	1	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	3	2	0	0	
	男性	0	0	0	0	2	0	0	2	4	0	0	1	1	0	6	0	0	0	0	0	2	0	2	2	0	2	2	1	9	0	
	計	0	0	0	2	4	0	0	6	5	0	0	2	1	0	8	0	0	0	0	2	0	2	5	0	2	5	3	9	0		
日本テレビ プラス1 (17:50-18:17)	女性	0	0	0	3	4	0	0	7	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	
	男性	0	0	0	0	2	0	0	2	6	0	0	0	0	0	6	0	0	0	0	0	1	1	2	2	0	1	0	3	4	1	
	計	0	0	0	3	6	0	0	9	7	0	0	0	0	0	7	0	0	0	0	1	1	2	2	1	1	0	3	4	1		
総計	女性	0	0	0	17	9	0	0	26	9	0	0	3	1	0	13	0	0	0	1	0	0	0	1	9	1	1	13	7	3	0	
	男性	0	0	0	0	19	0	0	19	21	0	0	10	2	0	33	0	0	0	0	1	3	1	5	11	2	5	9	15	30	8	
	計	0	0	0	17	28	0	0	45	30	0	0	13	3	0	46	0	0	0	1	1	3	1	6	20	3	6	22	22	33	8	

*性別不明1人を除く

レポーター：事件の現場などで取材をする人物やボイスオーバー（VO）で登場する人物。VOやレポーターの姿が見えない場合、年齢は不明。

他のジャーナリスト：解説者や天気予報士など

取り上げられる人物：発言する人物。また、ある人物の行動やその人自身がニュースとなる場合、その人物も含まれる。

例）事件の犯人や被害者

注）同じ人物であっても、ニュース項目ごとにカウントしているため、数字はのべ人数である。

ると、「50～64歳」の男性9人で、この年齢層が特に多い。

日テレ「プラス1」では、取り上げられる人物は、女性1人、男性11人で、ほとんどが男性である。年齢をみると、「35～49歳」3人、「50～64歳以上」4人で、高齢の人が多い。

取り上げられる人物を全局総計で見ると、女性70人に対して男性137人となっており、男性が女性の約2倍である。年齢分布では、女性で最も多いのは「19～34歳」、男性で最も多いのは「50～64歳」の年齢層であることがわかる。

以上、コーディングした登場人物の性別と年齢の相関関係から、ニュースを伝える人々もニュースで取り上げられる人物も年齢分布は男性の方が女性よりも高くなっていることがわかった。しかも、登場する人数も男性が女性の2倍近い。この分析から、ニュース番組は、依然として伝統的な家父長制を肯定するジェンダーの価値観にもとづく女性と男性のリプレゼンテーションを提示し続けているといえよう。

ここでは、コーディング結果の一部を報告しただけであるが、来年2月ごろ発表予定の世界のコーディングデータと比較するためにも、今後、さらに詳細な分析を続けていく予定である。



Part2.

各地で展開したメディア・リテラシーワークショップ

●コーディングからワークショップへ

つぎに、2月下旬に、京都、岡山、横浜で行った質的分析のためのワークショップについて報告する。

前号で述べたとおり、このワークショップは、ニュースの構成を分析することで、コーディングでは抜け落ちていた背景的に映し出される個人や集団、映像技法や音声技法にも注目しながら、メディア側のニュースバリエーションの判断を読み解き、ニュース報道を多角的な観点から質的に分析するものである。

●世界モニター日のニュース

GMMPのモニター日は、とくに大きな出来事が起こっていない普通の日のニュースを対象にしている。まず、2.16のモニター日には、どのような出来事がニュースとして取り上げられたのか、ここで簡単に述べておく。

この日は、①北朝鮮・金正日総書記の誕生日であったため、誕生日の祝賀行事および北朝鮮の国内状況や外交の問題、②ニッポン放送の株をめぐるライブドアとフジテレビの対立、③大阪・寝屋川の小学校で起きた教師殺傷事件、④京都議定書発効などのニュースがいずれの番組でも大きく取り上げられた。

各モニターグループには、これまでメディア・リテラシーを学んできた人も多数参加していた。そのため、コーディングの段階で、モニター日のニュースにさまざまなジェンダー・バイアスがみられることを指摘する声やニュースバリエーションについての議論も数多くあった。各地で行った質的分析のためのワーク

ショップでは、さらに、なぜニュース報道にジェンダー・バイアスが根強く存在しているのか、そのことが私たちにとってどういう意味をもつのか、などについて、参加者とともに考えた。

●ワークショップの流れ

ワークショップは、いずれのグループでも、おおむね、以下のような手順で行われた。

- ①「番組構成の流れと登場人物分析シート」の記入：番組全体をみながら、それぞれのニュース項目に登場する人物、使われている映像技法や音声技法を分析シートに各自で書き出す。
- ②番組の構成分析：取り上げられるニュースのテーマやニュース項目の順序、時間量などに留意し、数人のグループに分かれて番組全体の構成について話し合う。さらに、それらのニュース項目が、なぜニュースとして取り上げられているのか、誰にとって重要なニュースかを考える。
- ③登場人物の分析：登場人物の性別・年齢・人種／民族的背景・階級／階層・外見・職業／社会的地位に留意しながら、発言する人、クローズアップされる人、背景的に登場する人や集団などが、どのような人たちかをグループで話し合う。
- ④番組全体の構成と登場人物の関係：登場人物のジェンダーと各ニュース項目のテーマや内容がどうかかわっているか。そこにどのような価値観や考え方を読み解くことができるかをグループで考える。
- ⑤グループ発表：話し合った内容をグループごとに発表し、全体で対話をもつ。

京都・立命館大での取り組み

●コーディング

京都・立命館大では、鈴木ゼミナールの2回生7人と院生9人が参加し、2月17、18日にコーディング作業を行った。2回生がテレビを担当し、主に夕方の全国ニュースと関西のローカルニュース番組をコーディングした。学生たちは、作業の合間に、GMMPのメーリングリストをチェックして、世界各地のモニターグループからの生の声に触れ、世界規模の活動に参加していることを実感しながら、自分たちもメッセージを発信し、楽しんで参加していた。

●質的分析のためのワークショップ

2月23日にワークショップを実施。分析対象は、NHK「ニュース7」で、図表3は番組の構成の流れである。以下は、グループ活動をとおして行われた分析の報告である。

番組全体の構成の分析

・番組全体をみると、「大阪・寝屋川事件」、「ライブドアとフジテレビの対立」、「京都議定書発効」、「金総書記の誕生日」など、日本国内で起こった犯罪、経済や政治のニュースがトップニュースとして取り上げられ、時間量も多い。また、これらのニュースに、男性が数多く登場する。



・「ライブドアとフジテレビの対立」のニュースが3番目に位置し、時間量も6分と最も多い。一方、NHKが当事者として関わるニュースが、8番目「自民“朝日の回答 なおざり”」（時間量1分47秒）にある。これは、政治家の圧力を受けて、女性国際戦犯法廷をもとに制作したNHKの番組を改ざんしたと報じた朝日新聞とNHKの対立に関するニュースである。ここでは、朝日新聞の報道を批判する自民党議員を登場させることで、NHKの立場を擁護する報道を自ら行っている。

また、「ライブドアvs.フジの対立」のニュースを大きく取り上げるのも、NHKの問題から視聴者の目をそらすためではないかといえなくもない。

・女性に焦点をあてたニュース項目はほとん

どない。No. 9「50日ぶりに再会」で、インドネシアの津波によって離れ離れになった親子が再会を果たしたニュースを取り上げるのみである。このニュースは、オープニングでも取り上げられ、親子が泣きながら抱き合う場面をクローズアップしている。

登場人物の分析

・取り上げられる人物は、50歳以上の男性で、社会的権力をもっている人が多い。トップニュースとして取り上げられているビジネス、政治のニュースで発言しているのは、ほとんど男性政治家や企業のトップである。このような人物の取り上げ方によって、日本が男性中心の社会であることがいっそう強調されることになる。

・一方、インタビューされる女性は、肩書き

図表3. 番組名：ニュース7 放送局：NHK 放送日時：2005年2月16日（水）19：00～19：30

放送時刻	NO.	スタジオ	ニュースのタイトル	種類		時間量
				大分類	小分類	
19:00:00	—		OP	—	—	0:02:16
19:02:16	1	東京S	教職員を無差別に襲った疑い	社会	大阪・寝屋川事件	0:04:51
19:07:07	2		ネット上に少年の名前や“写真”	社会	大阪・寝屋川事件	0:00:54
19:08:01	3		取締役の過半数ライブドアが選任	経済	ライブドアvs.フジ	0:06:00
19:14:01	4		「京都議定書」きょう発効	社会	京都議定書	0:03:56
19:17:57	5		祝賀ムード総書記誕生日	政治	北朝鮮	0:02:58
19:20:55	6		各国包囲網 北朝鮮に迫る	政治	北朝鮮	0:01:28
19:22:23	7		東京三菱 被害者に補償へ	経済	経済	0:01:40
19:24:03	8		自民“朝日の回答 なおざり”	社会	事件・事故・災害	0:01:47
19:25:50	9		50日ぶりに再会	社会	事件・事故・災害	0:00:40
19:26:30	10		カモちゃん1ヶ月	社会	暮らし・時代風潮	0:00:31
19:27:01	11		春闘 交渉本格化	経済	経済	0:00:36
19:27:37	12		気象情報	天気	天気	0:01:53
19:29:30	13		ED(仙台市内の映像)：株価情報(テロップ)	経済	経済	0:00:30

をもたない人びとで、感情を露にしたり、個人的な経験を語ったりすることが多い。

・また、「大阪・寝屋川事件」のニュースでは、献花をする人たちが数多く登場する。そのなかには男性も含まれているが、インタビューを受けるのは女性だけであり、泣きながら発言している。ところが、事件を捜査する警察官や取材する報道陣などは、ほとんど男性である。事件の悲惨さを伝えるのが女性で、解決するために動くのが男性という性別役割分業を明確に提示している。

・キャスター、記者、レポーターは男性ばかりである。女性はボイスオーバーでのみ登場する。

番組全体の構成と登場人物の関係

・インドネシアの津波のニュースでは、母親の泣くシーンをとくにクローズアップしている。番組は、このニュースをヒューマン・インタレストとして扱っているが、津波被害の現状を伝えるなど、もっと災害に焦点をあてることもできたはずである。感情的な側面のみを強調することで、津波被害の社会的意味を矮小化している。



・政治や経済のニュースが数多く取り上げられ、そこに男性が多く登場するため、番組全体が男性中心のニュースとなっている。その

ような番組で、津波によって離れ離れになっていた親子の再会を報じるニュース (No. 9「50日ぶりに再会」) や海岸に流れ着いたアザラシの光景を伝えるニュース (No. 10「カモちゃん1ヶ月」) など、人びとの感情に訴えるような情緒的なニュースは欠かせないものとして挿入されている。それらのニュースで、涙を流したり、アザラシを見て歓声をあげたりするのが、女性の役割である。そうではなく、たとえば、NGOの女性が津波による被害の状況や現地で始まっている支援内容などを語る構成であれば、女性が果たす役割は大きく異なるものになっていただろう。

岡山「メディア・フォーラムおかやま」 での取り組み

●コーディング

メディア・フォーラムおかやまは、岡山市立東山公民館、岡山市男女共同参画社会推進センター「さんかく岡山」、岡山市立高島公民館の3ヶ所でメディア・リテラシー連続講座を実施し、その一環としてGMMPに参加した。各講座の一部にコーディング作業を組み込み、夕方の全国と岡山ローカルのニュース番組をコーディングした。参加者は、大学生や地域でボランティア活動に取り組む人、公民館の職員などである。モニター日に新聞を読んだメンバーから、「なぜGMMPがニュースになっていないのか」との声もあった。

●質的分析のためのワークショップ

2月26日に、東山公民館の講座の1コマを使ってワークショップを実施した。これには、日本GMMPサポートデスクも参加。分析対象は、山陽放送 (TBS系) 「ニュースの森」である。図表4の番組の構成の流れにあるとおり、



前半は東京のスタジオから全国ニュースを、後半は岡山のスタジオからローカルニュースを放送している。ここでは、全国ニュースのみを分析対象とした。以下は、グループ活動をとおして行われた分析の報告である。

番組全体の構成の分析

・トップニュースには、「フジテレビとライブドアの対立」のニュースや「大阪・寝屋川事件」などの出来事が取り上げられているが、それはメディアが重要であると判断し、選択したものである。誰にとって重要か、本当に重要なニュースなのか。また、女性に焦点をあてたニュースはほとんどない。

登場人物の分析

・GMMPのモニター日は、特別な日のニュースではなく、ふつうの日のニュースである。登場人物は男性が多く、女性が少ないという点も、普段は意識せずに見ているが、改めて見ると実に少ない。とくに働いている女性が驚くほど少ない。「大阪・寝屋川事件」に登場する女性教員、うどん店で働く女性、「確定申告」のニュースで登場する芸能人の3人のみである。

・「フジテレビとライブドアの対立」では、ライブドアの堀江社長、フジテレビの日枝会長、M&Aコンサルティングの村上氏の3者が登場する。経済的な力をもつ男性のみが取

り上げられている。

番組全体の構成と登場人物の関係

・「フジテレビとライブドアの対立」のニュースでは、経営者側の人間しか登場しない。また、現在の状況を説明する際には、CGやアニメーションを使って彼らの関係を提示し、そこにコミカルなBGMを加えるという構成である。メディアは、まるで株をめぐるマネーゲームであるかのようにこの問題を捉え、視聴者にとってどういう意味があるのかを何も示していない。報道で欠けているのは、オーディエンスである市民の視点である。



横浜「FCT事務所に集まった会員グループ」による取り組み

●コーディング

2月18、21日の両日、東京、神奈川、千葉在住のFCT会員が、FCT事務所に集まり、民放4局の夜のニュース番組を対象にコーディングを行った。

●質的分析のためのワークショップ

2月27日にワークショップを実施。分析対象は、TBS「ニュース23」で、図表5は、番組全体の構成の流れである。以下に、グループ活動をとおして行った分析を報告する。

番組全体の構成の分析

・ハードニュースが先で、ソフトニュースが

図表4. 番組名：ニュースの森／イブニングニュース 放送局：山陽放送（RSK：TBS系列）
放送日時：2005年2月16日（水）17:50～

放送時刻	NO	スタジオ	ニュースのタイトル	種類		時間量
				大分類	小分類	
17:50:00	—	東京 S	OP	—	—	0:00:20
17:50:20	1		フジテレビVSライブドア 鍵握る【村上ファンド】とは	経済	ライブドアvs.フジ	0:04:17
17:54:37	2		大阪・教職員殺傷事件 グラウンドに連れ出そうとして	社会!①	大阪・寝屋川事件	0:02:34
17:57:11	3		相次ぐ凶悪事件 自治体・対策練り直し	社会①	大阪・寝屋川事件	0:02:33
17:59:44	4		バイク窃盗団摘発 役所「盲点」つき偽装工作	社会!	事件・事故・災害	0:01:50
18:01:34	—		次のニュースの予告（20秒）／CM（2分）	—	—	0:02:20
18:03:54	5		未明に震度5弱 茨城などでけが26人	社会①	事件・事故・災害	0:00:55
18:04:49	6		金正日総書記 今日63歳の誕生日	政治①	北朝鮮	0:03:13
18:08:02	—		次のニュースの予告（6秒）／CM（2分）	—	—	0:02:06
18:10:08	7		天気予報	天気	天気	0:00:25
18:10:33	8		地球温暖化防止 京都議定書発効	社会③	京都議定書	0:00:28
18:11:01	9		マイケル被告 体調不良で入院	芸能	芸能	0:00:22
18:11:23	10		全国の税務署で 確定申告スタート	社会②	暮らし・時代風潮	0:00:18
18:11:41	11		前期比0.1%減年率0.5%減GDP3期連続マイナス成長	経済	経済	0:00:19
18:12:00	12		海賊版DVD 公開前の作品が被害	社会①	事件・事故・災害	0:06:50
18:18:50	—	イブニングニュースのOP	—	—	0:00:30	
18:19:20	1	岡山 S	確定申告始まる	社会②	暮らし・時代風潮	0:01:00
18:20:20	2		スマトラ沖被災国際貢献大学が現地に職員派遣	社会①	事件・事故・災害	0:01:04
18:21:24	3		岡山宮崎線きょうまで	社会②	暮らし・時代風潮	0:01:40
18:23:04	4		岡山大学大学院入学試験で出題ミス	社会②	暮らし・時代風潮	0:01:00
18:24:04	5		岡山大学全学部学科の最終倍率は	社会②	暮らし・時代風潮	0:01:56
18:26:00	6		香川県4期連続マイナス予算	政治②	その他（地方行政）	0:00:22
18:26:22	7		倉敷市も緊縮予算	政治②	その他（地方行政）	0:00:53
18:27:15	8		娘を虐待死させた両親に懲役刑	社会①	事件・事故・災害	0:01:02
18:28:17	9		湯郷温泉で新たな泉源発掘	社会②	暮らし・時代風潮	0:00:58
18:29:15	10		大卒予定者への就職説明会	社会②	暮らし・時代風潮	0:01:41
18:30:56	—		次のニュースの予告（16秒）／提供（10秒）／CM（2分）	—	—	0:02:26
18:33:22	11		倒木被災地に二次災害のおそれも	社会①	事件・事故・災害	0:03:27
18:36:49	—		次のニュースの予告（11秒）／CM（1分45秒）	—	—	0:01:54
18:38:43	12		花粉飛散がまもなく本格化	社会②	暮らし・時代風潮	0:02:38
18:41:21	13		映画「ラストサムライ」主演在米俳優母校へ	社会②	暮らし・時代風潮	0:01:57
18:43:18	—		CM	—	—	0:01:45
18:45:03	14		警察官駅伝は	スポーツ	スポーツ	0:01:18
18:46:21	—		次のニュースの予告（13秒）／CM（1分45秒）	—	—	0:01:58
18:48:19	15		天気予報	天気	天気	0:02:02
18:50:21	—		CM	—	—	0:00:35
18:50:56	16		欽ちゃん球団と四国リーグ	スポーツ	スポーツ	0:01:39
18:52:35	17		「おめざフェア」始まる（TBS系番組関連の催し物案内）	社会②	暮らし・時代風潮	0:00:33
18:53:08	—		明日の動き	—	—	0:00:22
18:53:30	—	ED	—	—	0:00:33	

後という順序で構成されている。

・「京都議定書発効」のニュースに関しても、まず、No. 5「水没する国・ツバルは」で、ツバルの深刻な状況を示し、つぎにNo. 6「私たちの生活も見直しへ」で、節電を呼びかける。No. 6のニュースでは最後に、節電を奨励するための環境庁のキャラクター「そら豆のこまめちゃん」を紹介して終わる。最初に深刻な問題を提起し、最後は節電を呼びかけ、キャラクター紹介で軽く終わるといった構成になっている。

登場人物の分析

- ・登場人物は男性中心である。インタビューの際、男性には肩書きがあるが、女性は無名の扱いになっていることが多い。
- ・女性の専門家は登場しない。
- ・小泉首相が複数のトピックで何度も登場している。
- ・No. 1「金総書記誕生日」のニュースとNo. 2「米朝 深まる対立の裏事情」のニュースでは、2人の専門家のコメントを続けて挿入し、専門家のコメントによって番組制作者が設定する論調を引き出そうとしている。また、男性キャスターの「ぶっそうなメッセージが届いている」、女性キャスターの「核兵器に関する発言が飛び出しました」という発言によって、危機感を煽るような構成になっている。



専門家やキャスターの発言がニュースの構成において重要な意味をもつ。

番組全体の構成と登場人物の関係

- ・女性に焦点をあてたニュースは少ないが、唯一、No. 6「京都議定書 私たちの生活も見直しへ」では、取材記者も女性で、取り上げる人物も女性中心である。しかし中心的に取り上げられるのは、冷蔵庫の使い方などを工夫して節電し、省エネ生活を送っている30歳前後の女性である。これは、家庭の仕事は主婦の担当という、伝統的な性別役割分業にもとづく報道の仕方といえよう。
- ・北朝鮮のニュースでは、エンターテインメントの担い手として、金総書記の誕生日を祝う若い女性の映像を多用している。



●対話を通して

以上の3つのワークショップで取り上げたニュース番組全体をみると、どの番組でも、取り上げられるニュース項目の選択やその順序など、番組の構成の仕方が非常に似通っている。政治や経済、事件を扱うニュース項目が番組の上位で取り上げられ、時間量も多いことから、これらのテーマを重視して番組を構成していることがわかる。

そして、政治や経済のニュース項目には主として男性が登場し、女性はほとんど登場しない。このようなニュースで取り上げられる

図表 5. 番組名：ニュース23 放送局：TBS 放送日時：2005年2月16日（水）22：54～

放送時刻	NO.	スタジオ	ニュースのタイトル	種類		時間量
				大分類	小分類	
22:54:00	—		OP	—	—	0:00:36
22:54:36	1		金総書記 誕生日 祝賀ムードの中“核兵器”発言	政治②	北朝鮮	0:01:55
22:56:31	2	東京 S	「米朝 深まる対立の裏事情」	政治②	北朝鮮	0:00:13
22:56:44			提供 (10秒)/CM (1分30秒)			0:01:40
22:58:24			「米朝 深まる対立の裏事情」のつづき			0:03:19
23:01:43	3		米・専門家が断言 北朝鮮問題の打開策	政治②	北朝鮮	0:02:53
23:04:36	4		ニッポン放送買取合戦 キーマンの村上ファンドって…?	経済	ライブドアvs.フジ	0:03:27
23:08:03	5		京都議定書発効 水没する国・ツバルは	社会③	京都議定書	0:11:12
23:19:15	6		京都議定書発効 私たちの生活も見直しへ	社会③	京都議定書	0:03:13
23:22:28	—		次のニュースの予告 (20秒)/CM (2分)	—	—	0:02:20
23:24:48	7		大阪・教職員殺傷事件 グラウンドに連れ出そうとして…	社会①	大阪・寝屋川事件	0:02:06
23:26:54	—		次のニュースの予告 (14秒)/CM (2分)	—	—	0:02:14
23:29:08	8		未明の震度 5 弱	社会①	事件・事故・災害	0:00:34
23:29:42	9		確定申告スタート	社会②	暮らし・時代風潮	0:00:27
23:30:09	10		「やや長い踊り場」(日本のGDP)	経済	経済	0:00:26
23:30:35	—		次のニュースの予告 (10秒)/CM (1分30秒)	—	—	0:01:40
23:32:15	11		スポーツ 野球	スポーツ	スポーツ	0:07:07
23:39:22	12		スポーツ サッカー	スポーツ	スポーツ	0:00:28
23:39:50	13		スポーツ K-1	スポーツ	スポーツ	0:00:33
23:40:23	—		CM	—	—	0:02:00
23:42:23	14		タイトルなし (奈良市内で22歳の女性死亡)	社会①	事件・事故・災害	0:00:32
23:42:55	15		いよいよあす開港 日本で3番目の国際ハブ空港	社会②	暮らし・時代風潮	0:00:50
23:43:45	16		天気予報	天気	天気	0:01:09
23:44:54	—		ED/提供 (10秒)	—	—	0:02:28

男性とは、主に社会的地位の高い人物、すなわち政治家や企業のトップなど決定権をもつ人物であり、彼らの行動や発言を中心にニュースが構成されている。

一方、女性を取り上げられる場合は、無名の市民で、泣いている顔など感情的な場面のクローズアップが多用されている。また、たとえ発言していても感情的な意見を述べるだけ、など、事件の悲惨さや情緒的な側面を伝える役割として登場することが多い。

以上の分析から、ニュース番組における女性の人数の少なさや、ジェンダー・ステレオタイプな登場の仕方は、男女の社会的な権力関係を示していることがわかる。男性は政治、経済、社会的なパワーをもつ人として、女性はそのようなパワーをもたない人として登場している。ニュースは、政治、経済、社会的なパワーをもつ人=男性が社会を動かすという「現実」を私たちに提示しているのである。国連『北京・行動綱領』が「ほとんどの国

の印刷メディアや電子メディアは、変化しつつある世界で女性たちが多様な生き方をしていることや、社会的に多くの貢献をしていることについて、調和のとれた全体像を提示していない」と指摘してからすでに10年がたつ。しかし、コーディング結果やワークショップで参加者が指摘しているように、私たちの日常では、ジェンダーの公正・公平を欠いた姿勢のニュース番組が依然として続いている。

メディアは、そのことにいつまで無自覚なままだのだろうか。市民である私たちはそれをいつまで放置しておくのか、という二重の問いかけがGMMPに取り組む中で浮かび上がってきた。

Part3.

2.16夕方のニュース番組の構成

今回のGMMPは、各地から多くのモニターグループが参加したことで、全国とローカルの視点から、日本のメディア状況を考えるよい機会となった。コーディング終了後、各グループで録画した番組を取めたビデオテープをコーディネーターのもとへ送ってもらい、詳細なメディア分析を行った。ここで、分析結果の一部を報告する。

●全国とローカルのニュース

まず、各グループが録画したすべてのニュース番組を見ながら、番組の構成の流れを書き出し、その結果をもとに、図表6. 夕方のニュース番組編成一覧を作成した。各番組で、網かけのある部分が東京キー局からのニュース、ない部分が地方局からのニュースを表している。

図表6から、夕方のニュース番組とって

も、地域・放送局によって、番組開始時刻や放送時間が大きく異なるし、一見して東京発のニュース番組の時間量が多いことがわかる。

まず、図表6から地方局の番組編成をみると、夕方のニュース番組は、東京キー局からの全国ニュースと地方局からのローカルニュースで構成されていることがわかる。例外は、「とびっきり!しずおか スーパーJチャンネル」(テレ朝系)が16時50分と早い時間から放送を始めているが、17時54分からの全国ニュース開始までは、地方局からの放送である。なお、17時台のローカル番組の内容は、料理の仕方や流行の店を紹介するなど、情報番組のような構成になっており、ニュース番組とは言い難い。

一方、放送開始時刻の早い番組は、17時台に東京キー局のニュースをそのまま放送している場合が多い。

たとえば、秋田の「スーパーニュース」をみると、16時59分から東京キー局のニュースを、18時17分からローカルニュースを放送している。ただし、ローカル番組の中で、スポーツニュースだけは東京キー局からの放送である。この番組の放送時間は、1時間24分25秒であるが、そのうち、東京キー局からのニュースが1時間24分25秒で72.3%、ローカルニュースが32分25秒で27.7%であり、放送時間を長くすることで、東京からのニュースの時間量が劇的に増えていることがわかる。

図表6からわかるように、どの地域の番組でも、まず東京キー局からのニュースを放送し、つぎに地方局からのローカルニュースを放送している。各放送局は東京キー局を中心とするネットワークを構築しているが、情報の流れは、東京から地方へという一方的な

図表 6. 地上波夕方のニュース番組編成一覧：系列×地域（2005年2月16日）

			放送時刻							
系列	放送局	地域	17:00	25	30	18:00	30	19:00	30	
	NHK	東京						00	ニュース7	
TBS	TBSテレビ	東京				50	ニュースの森			
	毎日放送	関西				50	ニュースの森	19	VOICE	
	—	秋田								
	静岡放送	静岡				50	ニュースの森	20	テレビタ刊	
	山陽放送	岡山				50	ニュースの森	18	イブニングN	
テレビ朝日	テレビ朝日	東京	55	Jチャンネル						
	ABC	関西				54	Jチャン	17	ニュースゆう	
	秋田朝日放送	秋田				00	Jチャン	18	Jチャンあきた	
	静岡朝日放送	静岡	50	とびっきり!しずおか スーパーJチャンネル						
	瀬戸内海放送	岡山	55	KSB Jチャンネル						
フジテレビ	フジテレビ	東京	59	スーパーニュース						
	関西テレビ	関西				54	スーパーニュースほっとカンサイ			
	秋田テレビ	秋田	59	スーパーニュース					54	AKTスーパーニュース
	テレビ静岡	静岡				54	スーパーニュース			
	OHKテレビ	岡山				54	OHKスーパーニュース			
日本テレビ	日本テレビ	東京				プラス1				
	読売テレビ	関西				50	プラス1	17	スクランブル	
	秋田放送テレビ	秋田				50	プラス1	17	プラス1あきた	
	第一テレビ	静岡				50	プラス1	17	プラス1しずおか	
	西日本放送	岡山				ワイドニュースブラ		17		

ので、中央集権的な体制にあるといえる。

東京キー局の放送をみると、民放の番組については、「ニュースの森」が17時50分から、「Jチャンネル」が16時55分から、「スーパーニュース」が16時59分から、「ニュースプラス1」が17時25分から、それぞれ放送を開始している。新聞の縮刷版を使って過去の放送時間を調べると、1994年にはどの局も18時～19時まで1時間の枠で番組を放送していた。ここ10年で、フジ、テレビ朝日、日本テレビの各番組は、増減を繰り返しながらも、放送開始時刻を前倒しして、大幅に放送時間を増やしていることになる。なお、NHK「ニュース7」の放送時間は、19時～19時30分までで、ここ10年、変動していない。

●取り上げられるニュースの種類

では、東京キー局の夕方のニュース番組で

取り上げられるニュースとは、どのような内容なのだろうか。取り上げられるニュースの種類を調べるために、各番組の構成の流れを書き出し、それぞれのニュース項目を政治、経済、社会などに分類して、図表7を作成した。その際、①金正日総書記誕生日の祝賀行事および北朝鮮の国内状況や外交の問題、②ライブドアとフジテレビの対立、③大阪・寝屋川の小学校で起きた教師殺傷事件、④京都議定書発効に関する項目がどの番組でも多かったので、それぞれの時間量を集計した。

「政治：北朝鮮関連」のニュースは、どのニュース番組でも取り上げられている。とくに、「スーパーニュース」4本、23分57秒（番組放送時間の27.2%）、「ニュースプラス1」4本、21分41秒（同28.4%）で、放送時間の長い番組では、本数、時間量ともに多い。一方、

政治に関する他のニュースは、ほとんど取り上げられていない。「ニュースプラス1」が、政治家の汚職事件を扱っているのみである。このように、政治のニュースは、北朝鮮関連に偏っている。

「経済：ライブドアvs.フジ」のニュースは、当事者であるフジ以外、どの番組でも扱っている。「ニュース7」は6分(21.6%)と夕方のニュースではNHKが突出している。一方、経済に関する他のニュースは、「ニュース7」を除いて、どの番組も本数、時間量ともに少ない。「ニュース7」や「Jチャンネル」では、銀行のキャッシュカード不正使用の問題や春闘などのニュースも取り上げているが、「ニュースの森」、「ニュースプラス1」では、ライブドアのニュースの他に、株価・為替情

報を扱っているのみである。

「社会：大阪・寝屋川事件」のニュースは、どの番組でも取り上げられている。関連する出来事として、学校の防犯対策のニュースを伝えるなど、本数、時間量ともに多い。「社会：事件・事故・災害」のニュースは、交通事故や強盗、火事などのニュースをストレートニュースという形で短く伝えている。

「社会：暮らし・時代風潮」のニュースをみると、「ニュース7」では「カモちゃん1ヶ月」(図表3のNo.10)と題して、海岸に流れ着いたアザラシの様子を伝えている。「ニュースの森」では、番組放送時間の32.4%を占めているが、内容は、流行のレストランの紹介などである。また、「Jチャンネル」では新しくオープンした温泉を取り上げ、温泉に入る

図表7. 東京キー局・夕方のニュース番組で取り上げられるニュース項目の種類

ニュース 番組・放送局	政治		経済		社会					芸能	スポーツ	天気	小計	その他 OPや CM等	計
	北朝鮮 関連	その他	ライブドア VS フジ	その他	大阪・ 寝屋川 事件	事件・ 事故・ 災害	暮らし・ 時代風潮	京都 議定書 発効							
ニュース7 NHK (19:00-19:30)	本数	2	0	1	3	1	3	1	1	0	0	1	13	—	—
	時間量	0:04:26	0:00:00	0:06:00	0:02:46	0:04:51	0:03:21	0:00:31	0:03:56	0:00:00	0:00:00	0:01:53	0:27:44	0:02:16	0:30:00
	割合	16.0%	0.0%	21.6%	10.0%	17.5%	12.1%	1.9%	14.2%	0.0%	0.0%	6.8%	100.0%	—	—
ニュースの森 TBS (17:50-18:55)	本数	1	0	1	1	2	4	2	1	1	4	4	21	—	—
	時間量	0:03:13	0:00:00	0:04:17	0:00:19	0:05:07	0:11:00	0:16:04	0:00:28	0:00:22	0:04:59	0:03:45	0:49:34	0:15:26	1:05:00
	割合	6.5%	0.0%	8.6%	0.6%	10.3%	22.2%	32.4%	0.9%	0.7%	10.1%	7.6%	100.0%	—	—
Jチャンネル テレビ朝日 (16:55-19:00)	本数	1	0	1	1	6	6	2	1	2	1	1	22	—	—
	時間量	0:12:44	0:00:00	0:06:41	0:03:18	0:15:26	0:07:53	0:15:56	0:02:38	0:16:43	0:12:25	0:02:10	1:35:54	0:29:06	2:05:00
	割合	13.3%	0.0%	7.0%	3.4%	16.1%	8.2%	16.6%	2.7%	17.4%	12.9%	2.3%	100.0%	—	—
スーパー ニュース フジ (16:59-19:00)	本数	4	0	0	0	3	6	2	0	5	3	1	24	—	—
	時間量	0:23:57	0:00:00	0:00:00	0:00:00	0:10:29	0:13:46	0:20:53	0:00:00	0:10:35	0:05:39	0:02:47	1:28:06	0:32:54	2:01:00
	割合	27.2%	0.0%	0.0%	0.0%	11.9%	15.6%	23.7%	0.0%	12.0%	6.4%	3.2%	100.0%	—	—
ニュース プラス1 日本テレビ (17:25-19:00)	本数	4	1	1	1	2	8	1	1	3	3	2	27	—	—
	時間量	0:21:41	0:00:38	0:02:34	0:00:08	0:08:26	0:06:15	0:17:30	0:00:40	0:06:52	0:07:51	0:04:35	1:17:10	0:17:50	1:35:00
	割合	28.1%	0.8%	3.3%	0.2%	10.9%	8.1%	22.7%	0.9%	8.9%	10.2%	5.9%	100.0%	—	—
計	本数	12	1	4	6	14	27	8	4	11	11	9	107	—	—
	時間量	1:06:01	0:00:38	0:19:32	0:06:31	0:44:19	0:42:15	1:10:54	0:07:42	0:34:32	0:30:54	0:15:10	5:38:28	1:37:32	7:16:00
	割合	19.5%	0.2%	5.8%	1.9%	13.1%	12.5%	20.9%	2.3%	10.2%	9.1%	4.5%	100.0%	—	—

若い女性客が映し出される。「スーパーニュース」では確定申告をする女性芸能人をクローズアップし、「ニュースプラス1」では、家を出した10代の少女たちのドキュメントを放送している。前述の質的分析で、ニュースは情緒的な部分が不可欠であるかのように構成され、それを担うのが女性の役割であると指摘したとおり、「暮らし・時代風潮」のニュースはいずれの番組でも取り上げられ、これらのニュースで数多くの女性が登場する。

また、「芸能」のニュースは、放送開始時刻の早い番組で、数多く取り上げられている。「スーパーニュース」では5本、10分35秒(12.0%)、「ニュースプラス1」では3本、6分52秒(8.9%)と、本数、時間量ともに多く、「Jチャンネル」では2本と本数は少ないものの、16分43秒(17.4%)と時間量は多い。これは、「芸能」のニュースが、ほとんど17時台に放送されているためであり、17時台のニュースはより芸能化した内容であることがわかる。

以上から、どの番組でも、取り上げられるニュース項目およびその内容が、非常に似通っていて横並びであり、とくに政治や経済のニュースを重視している。とはいえ、取り上げられるのは、ごく一部のニュースである。しかし、暮らし・時代風潮、芸能関係のニュースを必ず扱い、全体としては、エンターテインメント性をもたせるように構成されている。また、男性を登場させるときには、政治や経済のニュースが多く、社会的パワーをもつ人物を中心に構成し、女性を登場させるときには、暮らし・時代風潮、芸能関係のニュースが多く、若さを強調したり、感情的な意見のみをクローズアップしたりする。このように、登場人物の性別役割分業は、社会的な力関係

と深くかかわっており、それがニュースの種類や番組全体の構成のあり方を決定している。

こうしてみると、社会の担い手であることを自覚してごく当たり前に生きている私たちのような市民に出会うことがほとんどないのも当然だと改めて認識させられる。

そもそも民主主義社会におけるニュース報道の基本的な機能は、市民が必要な情報を得て自ら判断を下せるように、何が起きているかを伝える可能な限り多様な、多元的情報を迅速かつ正確に伝えることである。

そうであるなら、私たち市民は、望ましいニュース報道とは何かを追究していくためにも、ここで行った分析を手がかりに、ニュース報道の背景にあるメディア産業やそのメカニズム、市民による参加を可能にする条件など深く分析することが求められている。さらに、メディア関連法規やメディアの自主基準に対して、ジェンダーの平等・公正の観点から問題提起をしていくことも必要ではないだろうか。

このような点についてさらに考えていくため、本プロジェクトでは、モニター日の京都議定書発効を伝えるニュースを用い、6月以降、各地でワークショップを行ってきた。これらの結果については次号で報告する。

(GMMP日本コーディネーター 鈴木みどり、サポートデスク 登丸あすか)



オスロ・チャレンジとMAGICネットワーク

「子どもの権利条約」10周年記念国際会議から生まれた「オスロ・チャレンジ」

子どもの権利条約の批准から10年を経た1999年11月、この条約の実現で中心的な役割を果たしたノルウェー政府が、ユニセフの協力のもとに、首都オスロで「子どもの権利条約」10周年を記念する国際会議を開催した。オスロ会議には、さまざまなメディア・プロジェクトに参加している子どもや若い人たち、メディアの職業人やメディア関係者、子どもの権利の研究者が世界各国から招かれ、主として次の側面から、子どもの権利の発展とメディアがその発展で担うべき役割について討論をもった。

- ①子どもがニュースメディアをふくむメディアへアクセスする権利
- ②メディア教育、メディア・リテラシーへの子どもの権利
- ③子どもがメディアに参加する権利
- ④子どもがメディアの有害な内容や画面上の暴力から保護されることを保障する権利
- ⑤子どもの権利を擁護し推進するメディアの役割

オスロ会議の成果は「オスロ・チャレンジ」と呼ばれる行動計画としてまとめられたが、そこでは、次の6領域の各々でチャレンジ（挑戦）し行動するべきこと、何をなすべきかが、きわめて具体的に示されている。6領域とは、政府、子どもとかかわる仕事をしている組織や個人、あらゆるメディアにかか

わる職業人・関係者、子どもや若い人たち、産業界・メディア所有者、親・教師・研究者、である。

その具体的な内容を訳出すると、次のようになっている。

●政府に求められる行動

- ①子どもはコストではなく投資であり、負担ではなく可能性であることを認め、子どもの現実を、メディアに関連するものをふくめ、政策として実現する。
- ②子どもの権利条約の第12条、13条、17条の実現を図る。
- ③子どもや若い人たちの情報アクセスに必要なリソースの提供を保障する。
- ④子どものアクセスを高め、彼らのニーズに応え、子どもの権利を推進する目的で行われる取り組みを支援する。
- ⑤独立したメディアが基本であり、検閲や支配は子どもとおとなの両者にとって望ましくないことを確認し、メディアが独立と専門で十分に機能することのできる環境を確保する。

●子どもとかかわる仕事をしている組織や個人

- ①メディアの独立の必要性を民主主義の構成要素として尊重する。
- ②メディア専門家と協力しながら、子どもの権利を推進し、擁護し、子どものニーズに応える。

- ③メディアが子ども問題に関する情報について信頼できるリソースへアクセスできることを保障するために、効果的なメディア・リエゾンを提供する。
- ④広報や募金でミスリプレゼンテーションを規定するメディア・リエゾン政策を開発することで、子どもにかかわる問題の正確な報道を推進する。

●すべてのメディアのあらゆるレベルではたらくメディア人

- ①メディアではたらく人々のあいだで子どもの権利の問題を提起し、その擁護と推進がどのように可能になるか、また不適切な政策や行動によってどのように損なわれるかについて、具体的に考える。
- ②扇情的なやり方、ステレオタイプ化（ジェンダー・ステレオタイプをふくむ）、子どもを見下したり、子どもの権利を軽視したりすることを避けるために、メディアの倫理綱領を開発し推進する。
- ③商業的圧力に抵抗する。とくに、子どもにかかわる問題や子どもの権利を、表現の自由、公正な報道、搾取からの保護、消費者、などの点を軽視する商業的圧力に抵抗する。
- ④子どもとメディアの関係を高め、その肯定的な力と否定的な力の両方の理解を推進するためにはたらく。

●子どもや若い人たち

- ①子どもの権利条約に書かれている自分たちの権利を知り、理解し、それらの権利を実現する方法を求め、開発する。これには、情報と多様な視点へのアクセスする権利、自分たちがメディアとその開発に積極的に

参加する方法を求めることが含まれる。

- ②メディアについて学び、メディア消費者として十分な情報を得て選択することができるようになり、メディアが提供する多様性の最大の利益を手にするができるようになることをめざす。
- ③メディア制作への参加の機会をもち、メディア制作者に対して肯定、否定の両方でフィードバックする。
- ④子どもとメディアの肯定的な関係を支持する人々、親、教師、他のおとなや若い人たちと、メディアについての考えを共有する。

●産業界、メディア所有者

- ①新しいメディア製品や技術の開発で、子どものアクセス、参加、メディア教育、有害なメディア内容からの保護、などに関する子どもの権利に配慮する。
- ②商業的・財政的成功の追求において、子どもの最善の利益を最優先する。それによって今日の子どもが、すべての人びとが保護され、尊重され、自由になるようなグローバルな世界でおとなになるようにする。

●親、教師、研究者

- ①子どもがメディアへアクセスし、参加し、それを彼らの向上のために利用する権利を認め、支持する。
- ②子どもがメディア消費者として十分な能力を発達させて選択できるようになる保護的で支援する環境を提供する。
- ③メディアのトレンドと方向性について可能な限り多くの情報をえて、フォーカスグループなどのフィードバック・メカニズムへの参加や、メディア内容へのコメントや苦

MAGIC Media Activities and Good Ideas by, with and for Children

Spanish | Français | Contact us

LATEST NEWS UPDATE
July 13, 2005

MAGIC CALENDAR
• July 17- 21, 2005
Regional workshop for children's media initiatives to further child rights in South & Central Asia - Nepal

LATEST RESOURCES
Living with the media - A parents' guide for kindergarten kids - in German, Russian & Turkish

THE STATE OF THE WORLD'S CHILDREN
2005
CHILDHOOD UNDER THREAT

UNICEF

市民組織 (NPO/NGO) のあいだで情報と理念を共有し、連携を強めていくという目的のもとで、日々、活発に情報活動を行っている。

MAGICサイトの運営はノルウェー政府の基金で行われており、その設計、内容の作成、日々の更新などの具体的な作業にはイギリス、チェコなど世界各地に在住する個人とそのNPO/NGOが参加している。サイト上の情報は対象別に子ども (MAGIC children)、親 (MAGIC parents)、メディア (MAGIC media)、政府 (Government)、教師 (Teachers)、企業 (Private sector)、NPO/NGO、と

情の手続きを使って、そのようなトレンドや方向性の形成に積極的に貢献する。

もうひとつの成果、インターネットサイト「MAGICネットワーク」の開設

オスロ会議の成果として重要なもうひとつの点は、「オスロ・チャレンジ」を推進するためのグローバルなネットワークがインターネット上で開設されたことである。この「MAGICネットワーク」(<http://www.unicef.org/magic/index.html>)は、それ以来、子どもとメディアの領域で活動する専門家、研究者、

わかりやすく整理されている。頻繁に更新されるニュースやリソース (資料) のセクションもあり、それぞれリンク先も豊富である。

MAGICネットワークは英語によるサイトではあるが、メディアと子どもの問題に関心をもつ人にとっては不可欠な情報源といえる。私たちはMAGICにアクセスすることで、いま、この領域で何が問題になっているかを知り、何ができるか、何をなすべきかをグローバルな視野で考え、それぞれの行動で生かしていくことができるだろう。

(まとめ 鈴木みどり)

■研修セミナープロジェクト報告

FCT第6回メディア・リテラシー研修セミナー関西で初めて開催される

FCT第6回メディア・リテラシー研修セミナーは、3月26日(土)～27日(日)の2日間、とよなか国際交流協会の後援を得て、とよなか国際交流センターを会場に実施された。研修セミナーは2000年からスタートしているが今回、関西で初めての開催となった。

これは、徳島県立高校の教員研修に、鈴木代表が招かれ講演をしたことを機に、関西での開催を要望する声が高まり、急遽実施が決まったものである。参加者は25人。地域的には豊中市、高槻市など大阪府内や、京都府・兵庫県などの関西エリアを中心に、徳島県、岡山県、鳥取県、岐阜県などから集まった。参加者は、高校を中心に、小学校から大学までの教員、NPO/NGO関係者、行政職員、学生、メディア制作者などで、年齢層も20代～60代と、多様な顔ぶれであった。研修セミナーのリピーターもいた。

●『新版…』を授業で活用するために

2004年12月に『新版Study Guideメディア・リテラシー〔入門編〕』（鈴木みどり編、リベルタ出版刊）が出版されたが、今回のセミナーは教育現場で、この『新版』をメディア・リテラシーの授業で活用し実践していくために組み立てられた。さらに、『スキヤニング・テレビジョン日本版』もあわせて使用し、学びの場を創造的に展開できるようにした。各セッション(S)の組み立ては、次の通り。

第6回研修セミナー・プログラム

第1日(3月26日) 10:00～18:30

S1 メディア・リテラシーをどう学ぶか/S2 私とメディア、私たちとメディア/S3 メ

ディアは「現実」をどう構成するか/S4 テレビコマーシャルと映像言語/S5 広告がつくりだす文化・イメージと価値観の販売

第2日(3月27日) 9:30～17:00

S6 テレビドラマと現実の社会/S7 ニュース報道を読み解く/S8 メディア社会を生きる市民とメディア・リテラシー/S9 まとめ
S2からS8まではワークショップ形式でおこなわれ、2日間を通して活発なディスカッションが続けられた。

●研修セミナーに参加して

参加者の感想を紹介すると、「多様な考え、自分の気づかないことも知る喜び、そして、メディア・リテラシーという学びの視点を広げていきたいと思う」「徹底して対話から学ぶことの大事さを再確認したので、今後の活動で実践したい」「4月から本校でメディア・リテラシーの授業が始まるので、生徒たちに興味をもたせ、進んでいけるように努力したい」「同業者(教員)が多く、問題意識の共有がしやすかった。東海地方でも開催してほしい」「参加回数を重ねることで発見できることもあるので、今後も関西での研修の機会がほしい」「授業でトライしてみようと思う。フィードバックの機会がほしい」などである。

●研修セミナーの今後

FCTでは、第7回研修セミナーを8月6日～7日、神奈川県立かながわ女性センターの共催を得て開催する。今年は関西と首都圏とで2回セミナーを実施するが、今後も、複数回の開催を企画し、各地の要望に応じていきたいと考えている。(まとめ 新開清子)

データバンク

〔国内篇〕

●『〈実践〉ポピュラー文化を学ぶ人のために』渡辺潤・伊藤明己編著、世界思想社、2005年5月刊。

私たちの身のまわりにあふれるポピュラー文化は長い間、とるにたらないもの、くだらないものとされ、研究する意味などないと思われてきた。ポピュラー文化は、「唯一固有」の「高級」で「正当」な「西洋の」文化だけを相手にするアカデミックな世界の敵だったのである。しかし時代とともに、多様な人びとの「育った環境や家族のありかた、いつもの楽しみや日常の振る舞い」を、価値のないものとして一方的に切り捨ててしまうのではなく、そこに積極的な意味を見出し、研究のテーマとしてとりあげることが認められるようになった。その研究は経済の流れ、政治の動向、社会の規範、技術の活用といったさまざまな要素のなかにあるポピュラー文化と人びととの関係を探っていくことでもある。

本書は、このポピュラー文化を実際に学生が研究テーマとしてとりあげ、自分で調べ、考察していくことを想定したガイドになっている。

方法論を紹介する第1部「ポピュラー文化研究の方法」では、第1章で上記のようなポピュラー文化研究の経緯と研究していくための考え方が述べられ、第2章ではポピュラー文化を享受し、またみずからそれをつくり出す、ごくふつうの人びとの感情的な側面に注目した社会史研究の過程が書かれる。第3章では子どもが登場するテレビ・コマーシャルの分析調査の事例から映像テキスト分析の方法を、第4章では同性愛者のライフヒストリー研究を例にインタビュー（聞き取り）調査の技法を紹介している。第5章はファッション文化をテーマに、アンケート調査のデータの集め方と読み方について、第6章は量的な調査だけでははかれない、オーディエンスの具体的な経験を理解するための集団討論の方法を、それぞれとりあ

げている。

ポピュラー文化を研究するうえでは、自分がフィールドに飛びこんでいくことも必要になる。第2部「ポピュラー文化のフィールドワーク」では、お笑い、ポピュラー音楽、演劇集団、ストリートでのスケートボード、コミックマーケット、ゲームセンター、コンビニでの消費行動といったさまざまなポピュラー文化のフィールドに出ていった執筆者たちの経験が、その過程における失敗や意外な発見などの試行錯誤も含めて、具体的に語られている。

第3部「ポピュラー文化の諸相」では、身近に無限にあるポピュラー文化を研究する際の基本的なキーワード（エリート主義、ポピュリズム、ナショナリズム、グローバリズム、イデオロギー、ヘゲモニー、サブカル、アイデンティティなど）と代表的なテーマ（テレビ、インターネット、携帯、雑誌、音楽、風俗、食、住まい、ツーリズム、スポーツ、ギャンブルなど）を参考文献とともに解説している。また第15章では文献・資料の収集法が紹介される。（T）

●『ジャーナリズムの可能性』—シリーズ『ジャーナリズムの条件4』野中章弘編、岩波書店、2005年5月刊。

今年は戦後60年を迎えるが、9・11同時多発テロ事件以降の国内外の情勢を見る限り、戦争と平和をめぐる問題は現代の緊急の課題である。国家の発動する戦争に、従属や迎合することなく抵抗すること、また、個人情報保護法をはじめ、市民の自由な活動や言論・表現の自由を制限する法律が成立している今日、公権力の動きを監視しチェックすることがジャーナリズムの大きな役割である。そして、それを後押しする市民や世論の存在が民主主義社会においては不可欠なものである。しかし、近年の市民とジャーナリズムの関係を見る限り、メディア不信が指摘され、こうした両者の関係が成立しにくくなってきている。

編者たちは、こうした状況を打破するために本シリーズ4巻を編んだという。1巻では、ジャー

ナリズムとは何かという根源的な問いを、2巻では、今日の報道不信の構造解明とその対策を、3巻では、メディアと権力との関係を、それぞれ検討している。そして、この第4巻では、インターネット・メディアの台頭などの新しいメディアがもつ可能性を探っている。

それは、今日のメディアの危機的な社会状況を踏まえつつ、メディア再生の在り方を探り、オルタナティブなメディア環境の創出への可能性を検討し、その条件を提示するためである。本書は、理論を展開した書物というよりは、メディアの再生と変革の主体者として、ジャーナリズムの現実と日々格闘する人々の実践的報告といった趣のものである。

第I部「マスメディアの再生をめざして」は、イラク戦争報道やNHKの一連の不祥事などを題材にし、「客観・中立・公平」「公権力からの独立」「市民のため」といった「ジャーナリズムの基本原則」に立ち返るべく、テレビ・新聞のなかでジャーナリズムの精神を守るために奮闘している7名のジャーナリスト、メディア関係者の論考・報告を集めている。

第II部は、「市民型未来系ジャーナリズムの構築」である。インターネットや携帯電話が飛躍的に普及、発展している今日、デジタル化の潮流に乗りながらここ数年間でオンライン・ジャーナリズムの担い手たちが次々と出現してきた。事業化を射程に入れたものから、市民記者を擁したもの、NPO的な色彩が強いものまで、形態は様々である。ここでは、既存のマスメディアに対抗する形で登場したインターネットの新聞や放送の先駆者たち、メディアを市民の手に取り戻そうとするビデオ・アクティビズムの担い手たち9名が登場する。商業的・政治的な既存のマスメディアにではなく、オルタナティブなメディアにこそ「良質のジャーナリズム」を求めようと志向する彼らの活動を紹介している。

最後の第III部「ジャーナリストを育てる」では、日本のジャーナリズムの弱さは、教育の分野でメディア・リテラシーやジャーナリスト教育が準備

されていないことにあるとして、新人記者が記者としての土台を固める場所である支局の機能回復と強化や、大学や大学院における「ジャーナリスト教育」、そのための大学とメディア企業との協力など、ジャーナリストを経験した3名の教員が具体的な取り組みを語っている。(H)

●『ジェンダー白書3ー女性とメディア』北九州市立男女共同参画センター“ムーブ”編、明石書店、2005年3月刊。

「女性とメディア」について特集した『ムーブ叢書』の第3号である。

まず総論では、水田宗子が、マス・メディアからサイバーメディアへと至るメディアの変遷のなかで、女性をはじめとする社会的弱者に対する格差の問題が常に存在していることを述べている。そのうえで、メディア社会に対して女性が主体的な取り組みを展開していくことの重要性を強調している。

各論のなかでは、鈴木みどり「メディア・リテラシーとジェンダー」について論じている。そのなかで、日本においてジェンダーの問題を改善していくためには、伝統的なジェンダー観を意識化する作業が不可欠であり、そのためにメディア・リテラシーに取り組むことの重要性を強調している。

学びの具体的な実践例として、立命館大学で開講されている「メディア・リテラシー論I」が取り上げられ、参加型講義の組み立て方と、参加者の「学び」の内容分析が示されている。

講義で取り上げられたメディア・テキストは、小泉政権の下で行われた衆議院総選挙当日の開票速報番組(TBS系)のなかで放送された3種類のドキュメントVTRである。ジェンダーの視座から映像言語を分析すると、ドキュメントVTRは女性と男性、有権者と政治家、市民とメディア、といったそれぞれの関係性を不平等に表現していることを読み解くことができる。受講生はこのドキュメントVTRを分析し、参加者同士で討論と対話をもつなかで、学びを深めていく。

受講生がドキュメントVTRを分析して感じたこと、考えたことをまとめたメディア・ログ（分析レポート）を読んでいくと、受講生は分析活動に参加することによって、日常化しているメディアがジェンダー構造を強化する役割を果たしていることを発見していることが分かる。

なおそのほかの各論では、表現の自由・アニメ・テレビ・写真・美術・映画・文学・新聞・雑誌・歌謡曲・インターネット・広告について論じられており、非常に広範な領域を取り上げているのが本書の特徴である。(P)

●『検証 日本の組織ジャーナリズム—NHKと朝日新聞』、川崎泰資・柴田鉄治共著、岩波書店、2004年12月刊。

本書が出版された後、2005年1月に旧日本軍の慰安婦問題を扱ったNHKの特集番組が放映前に自民党幹部との接触により内容変更された、という事実が明らかになった。この問題はNHKへの政治介入を端緒としたにも関わらず、NHKが「朝日問題」としてすりかえた報道を繰り返したことから、NHK対朝日の対決のかたちになり、その後様々な社会的事件が起きたことにより、うやむやのままにされてしまった。

元NHK政治部記者と元朝日新聞社会部記者の著者たち。はからずも2人の共著によって、ほとんど予見されたとも言える報道メディアの検証が話題となって、版を重ねることになったのが本書である。

はじめに2人の対談のかたちで総括されているのは、1999年小渕政権時代に、日米ガイドライン関連法が成立したこと、日本では個人よりも国家を優位におく規制が次々とできてきたことである。国旗・国歌法、国民総番号制に直結する法、その延長線上に教育基本法、憲法の改正問題などがある。

そしてジャーナリズムは弱体化し、チェック機能を失う一方という現状は、例えばメディアが、イラクのサマワにジャーナリストが1人も入れない状況を受け入れていることにも伺える。NHKの

元報道局長が外務省の報道官になる時代だ、と川崎は嘆いている。

戦後60年、最もブレなかった朝日新聞の孤立化、そしてぐらつき、萎縮しつつある現状は、社会の保守化に対して持ちこたえられなくなりつつあるのだと憂慮している。

沖縄返還をめぐる日米の密約問題、いわゆる西山事件は、最近再審を求める動きが報道されているが、西山記者の有罪判決は日本のメディアの敗北であり、そこから立ち直れていないのが現状であるという具体例の検証も行われている。

創価学会のメディア支配を「魔の手」として明らかにしているのは、聖教新聞などの機関紙の印刷を毎日新聞、朝日新聞系列の大手新聞社が委託されていること、著作物の全面広告を引き受けることによる大新聞の広告収入依存などである。巧みな戦略により政治とメディアへの浸透が進み、結果として、報道されない事実があることも伺うことができる。

本書では、改憲をめぐる読売新聞と朝日新聞の世論調査のありようは、例えば巧みな質問ひとつで結果が非常に違ったものになることを指摘している。たとえば、「改正する必要があるか」（朝日）、「改正したほうがよいと思うか」（読売）といった聞き方の違いである。

「九条」をめぐる国民世論の綱引きはこれからますます熾烈になるだろう。世論調査の報道は、設問の仕方を十分にチェックすることが大切だ、と提言している。

巻末に再び対談を通して著者たちは、組織ジャーナリズムの問題として、今後記者クラブをなくし、メディアの相互批判力を高めることが大切としている。(K)

●『特集NHK番組改変と女性国際戦犯法廷』、『インパクション』146号、2005年。

ETV特集2001「戦争をどう裁くか」は、2001年1月29日から4夜シリーズで放映された。第二夜の番組「問われる戦時性暴力」は、女性国際戦犯法廷取材したが、元「慰安婦」や日本兵の証言、

「天皇有罪」「日本国家の加害責任」の判決の部分をカットし、予定にはなかった法廷を否定するインタビューを長々と入れるなど著しく改変されて放送された。この問題は「VAWWNET『戦争と女性への暴力日本』ネットワーク」が裁判を起こし、現在控訴審中だが、2005年1月朝日新聞の報道と当時のNHK担当デスクの記者会見によって、改変の背景に国会議員中川昭一と当時の内閣官房副長官であった安部晋三らによる政治介入があったことが明らかにされた。

特集は「NHK番組改変と政治介入—『戦争をどう裁くか』関係者座談会」と題して、VAWWNET、「メディアの危機を訴える市民ネットワーク」などの代表と番組の制作過程に関わったジャーナリストらが、事実経過の詳細を明らかにしながら、政治的圧力と自主規制の問題などについて議論する。

国家や政治介入から放送と取材対象者を守るべきものであるはずの放送局の「編集権」が、視聴者に対して抑圧的に機能させられている。政治介入を指摘された後、問題をすりかえるために意図的に行われた「裁判は北朝鮮の謀略」とする安部発言を垂れ流し続けた各メディアの責任は重大である。

また、昨今の「韓流ブーム」は日本国内における南北分断を助長してはいないか、何かにつけて北朝鮮を持ち出す動きは、改憲が視野に入れられている、などが指摘される。

続くエッセイで米山リサは、番組改変が行われる以前から圧力は続いていること、圧力にさらされるとNHKは下請け会社を切り捨ててきたが、その時、捨てられるのは現場の女性制作者たちであるというジェンダー構造を指摘する。事実経過を知る上で貴重な資料集が添付され、各界のコメントも含めて今号のほぼ三分の二が割かれた大特集となっている。(E)

●「『戦後60年』のジャーナリズム」2/表現の自由「『憲法にもとづく民主主義』の過程」奥平康弘
『総合ジャーナリズム研究』No.192、2005年春号。
『総合ジャーナリズム研究』では、2005年冬号、

春号と「『戦後60年』のジャーナリズム」を特集している。春号では、憲法学者であり、「九条の会」呼びかけ人の奥平康弘が、戦後60年という節目の時代にあつて「表現の自由」と憲法の関わりを分析している。まず、奥平は戦時の日本国〔日本社会〕を国内外への行為や影響力を考慮し「ならずもの国家」と規定する。そして、戦後の日本はこの「ならず者国家」からの脱却を図ってきたとする。筆者は、その取り組みが十分であったかどうかの基準は「憲法にもとづく民主主義」であり、それは「〈政治共同体の構成員すべてが平等な基本的諸自由を享有することを可能ならしめるべし〉とする政治原理にしたがつて、政治共同体を立ち上げ、そうした政治原理を細部にまで実践しつづけていく体制」であるとする。

筆者は、憲法21条「表現の自由」の実現という点で、まず占領期には超憲法的効力を持って占領軍がメディア統制をおこなったこと、放送分野では占領政策も関与して、日本放送協会が、戦前の古い体質を維持し、体制内的存在として戦後も出発したとする。同時に裁判所もまた、表現の自由が権利として結晶化することを遅らせる判例を積み上げた。

一方、憲法は「メディア・情報を要求する民衆・個人情報当事者（データ主体）、『調整役』に任ずる裁判官・行政庁など」など利害関係者がお互いに憲法の理念を実現すべく討議する機会を開いており、それに参加するのは「われわれの憲法上の責務」であるとする筆者は、戦後60年、まがりなりにその方向に向けて歩み始めてきたし、その背景には、憲法九条の持つ効果があったとする。

しかし、最近の改憲論は、九条および総体としての憲法体系の改編と一体のものであり、改憲勢力は、「憲法にもとづく民主主義」とは逆の国家改編をねらいとしていると強い危機感を表明している。冬号では、原寿雄が自らの戦争体験を踏まえ、現在のジャーナリズムに警鐘を鳴らしている。(N)

●シリーズ・ドキュメンタリー対談第一回森達也×綿井健陽「公正・中立って、何だ?」、『放送

レポート」No.194、2005年5月号。

オウム真理教を取り上げたドキュメンタリー映画「A」などを、これまでに制作してきた映像作家の森達也氏。その彼が、今関心を寄せているドキュメンタリストと語り合う対談シリーズである。

第1回は、ビデオ・ジャーナリストとして世界各地の紛争地域取材している綿井健陽氏がゲストとして招かれている。

対談は、綿井氏にとって初の監督作品となる、イラク戦争のドキュメンタリー映画「Little Birds」が完成して間もない頃に行われた。ビデオ・ジャーナリストの綿井氏がなぜ映画を制作しようと思うに至ったのか、その動機に森氏が迫ったり、映画における映像表現の可能性について両氏で議論を交わすなど、内容は多岐に渡っている。

標題にもなっている「公正中立」に関しては、NHKの番組改変問題を引き合いに出しながら、議論が展開されている。

まず森氏は、自分の経験に則して、テレビの現場では制作者の主観は出してはならず、公正中立や不偏不党で作ることが求められると指摘する。その上で、「主体的な思いを表現することがドキュメンタリーの作業」であり、「公正中立なんて、そもそもありえない」と持論を披露。

それに対して綿井氏は、「多くの人に伝えるためには、やはり反対の意見も重要だと思って公正中立を目指すのだったら僕はまだいいと思います」と述べている。

そしてより問題なのは、批判や抗議を恐れるあまり、微妙な部分を条件反射的に削除するような、制作者の萎縮した姿勢にあるとしている。さらに対談の最後では、「放送法三条に『政治的に公平であること』と書いてあります。でも、これは『一つの番組において』とは書いていない。これはそのテレビ局全体の姿勢を通じて公平にきなさい、ということですよ」と綿井氏は語り、まとめている。

森氏は確固たる信念を持って活動している制作者の1人だが、そうした彼がその時々ゲストを相手にどのように持論を展開し、議論を深めていくのか、シリーズの今後に期待したい。(Z)

●連載：走りながら考える第47回「啞然とするサンデープロジェクトの差別放送—視聴率アップのために部落差別を利用していないか—」、北口末広、『月刊ヒューマンライツ』No.204、2005年5月号。

テレビ朝日系、日曜朝放送の「サンデープロジェクト」は、2005年1月23日「『食肉のドン』の犯罪～『政・官・業』利権構造」と題して、食肉商社ハンナグループの問題を取り上げた。現在、公判中であるこの問題について司会の田原総一郎は、「被差別部落のなんとか言って、恐ろしがってる。何も恐ろしくない、本当は」、「マスコミがタブーとしてきた」、「(取材をしたら)大阪湾に浮くかもしれない」などの発言を次々と行った。これに対して視聴者から「被告の犯罪と被差別部落とは別のもの」などの意見が寄せられ、翌週の番組では、司会者、出演者が謝罪を行った。

筆者は、番組の冒頭で行われたこれらの発言は、後半に放送される内容への関心を高めて視聴率を維持しようとする「計算された発言であり、というっかり発言したというものではない」と指摘する。そもそも、公共放送で特定の人物の出自を断定するという重大な人権侵害を行った上で、被差別部落が「殺人集団である」ともとられかねない発言をしている。被告人が「悪い人」であることを強調し、さらにタブーに挑戦する番組の「勇敢な取材姿勢」を強調するために被差別部落が利用された。これらが被差別部落に対するステレオタイプを強化する増幅作用を生み、結果として一連の発言は差別煽動行為となった。

司会者はマスコミが被差別部落問題を「タブー視」していると批判し、視聴者やマスコミが偏見をもっていることを前提としながら、出演者たちの差別を助長するような発言を見逃さず。筆者は「テレビ朝日にとってタブーを破ることは、差別を煽動することなのか」と問い、さらに「『サンデープロジェクト』はタブー視を是正する取り組みを自ら行ってきたのか」と、問いかける。そしてこの放送の最大の被害者は被差別部落出身者であることを忘れないでほしいと結ぶ。(E)